

合戦からひもとく

「天皇が二人いる」混乱の時代

# 南北朝の動乱 主要合戦全録

渡邊大門・編



南北朝の戦い

入門書の

決定版

楠帯刀正氏

〈付録〉  
南北朝  
主要合戦全録  
ダイジェスト

国内を二分した大乱は、なぜ全国に広がり、半世紀以上に及んだのか？



南北朝の動乱 主要合戦全録

渡邊大門・編

星海社

213





近年、南北朝時代への関心が高まっており、優れた研究が相次いでいる。そうした研究に基づき、関連する一般書も続々と刊行された。東京堂出版から刊行された『南北朝遺文』をはじめ、地方自治体の史料編の刊行が研究を後押ししたといってもいいだろう。

南北朝時代の研究は、戦前においてもっと進んでいた。その発端の一つは、明治四十四年（一九一）の南北朝正閏論（南朝と北朝のいずれが正統であるかの論争）で議論が沸騰したところにある。近世では南朝正統が主張されたが、近代以降は両朝並立が学界の主流となった。やがて、南北朝正閏論は政治問題化し、紆余曲折を経て南朝が正統とみなされると、それは第二次世界大戦の終結までの認識となった。

その間、後醍醐天皇に与くみした楠木正成、新田義貞は忠臣とみなされ、敵対した足利尊氏らは逆賊と称された。尊氏に従った赤松円心の子孫は、赤松姓を憚はばって「赤鹿」などに改姓したとさえいわれている。また、後醍醐のために命を投げ出して戦う正成や義貞は、戦意高揚に利用された。こうして南北朝時代や南朝の忠臣の書籍は、かなりの数が戦前に刊行された。

ところが、終戦とともに天皇は神聖視されなくなり、唯物史観の台頭によってタブー視さ

れるようになった。そのような事情から、戦後長らく南北朝時代の研究は忌避されていたが、徐々に活発化。今では先述のとおり、南北朝時代の研究はもつともホットなテーマになっている。

本書は鎌倉時代後期の両りょうとうてつりつ統迭立にはじまり、明德三年（一三九二）の南北朝合一までの主要な合戦を中心に取り上げたものである。その際、合戦そのものだけでなく、そこに至るまでの各武将の動向、あるいは政治過程についても触れた。巻末には全体の流れを確認すべく、主要合戦の一覧を付けた。

本書を通して、各合戦の経過や詳細だけではなく、南北朝合一に至るまでの経緯をご理解いただけると幸いである。

渡邊大門



目次

はじめに 3

序章

両統迭立から正中の変・元弘の変まで

23

秦野裕介

南北朝の内乱はなぜ起きたのか 24

後嵯峨天皇の後継者分裂の事情 25

「正統」の道を歩む亀山天皇とその子孫 27

亀山天皇の失脚 28

大覚寺統の巻き返し 29

文保の和談 32

後宇多天皇の構想の破綻 33



第二章

鎌倉幕府の滅亡と室町幕府の成立

47

稲川裕己

正中の変はあったのか 33

『太平記』における「正中の変」 34

『花園天皇日記』における「正中の変」 36

邦良親王の死去と皇統の行方 39

花園上皇による『誠太子書』 40

元弘の変 41

「元弘の変」後の畿内的情勢 48

後醍醐天皇の隠岐脱出 50

足利尊氏の離反の背景 51

尊氏の挙兵と六波羅探題の陥落 53

鎌倉幕府の滅亡 54

建武政権下の尊氏 56

建武政権との訣別 57

箱根竹ノ下の戦い 60

尊氏の西走 62

筑前多々良浜の戦い 63

室町幕府の成立 65

## 第二章 中先代の乱と北条時行の敗死 69

前川辰徳

鎌倉幕府の滅亡 70

中先代の乱の歴史的位置 71

建武政権と東国 72

建武政権の失政 73

護良親王の失脚 74

西園寺公宗の計画 75

北条時行の挙兵 76

用水をめぐる紛争と中先代の乱 77

武蔵府中の戦い 78

女影原の戦い 79

護良親王の最期 79

鶴見合戦 80

北条時行の鎌倉入り 81

足利尊氏の下向 81

時行に与した人々 82

三浦一族の相剋 83

三浦一族の敗走 84

時行の敗死 85

### 第三章

## 摂津湊川の戦い、楠木正成の敗死

89

生駒孝臣

摂津湊川の戦いの位置付け 90

足利尊氏の建武政権からの離反 91

的中した正成の予想 92

使命を果たそうとした正成 94

第四章

和泉堺浦・石津の戦い  
107

湊川の戦い 95

新田勢の戦線離脱 97

同時代史料による戦いの顛末 99

湊川の戦いの余波 101

さらに続く楠木一族の抵抗 103

上杉清子の書状 108

北畠家について 109

鎌倉時代における北畠顕家の官歴 110

北畠顕家の陸奥への赴任 110

陸奥將軍府体制の発案者はだれか 113

陸奥將軍府と北条氏殘党の戦い 114

中先代の乱と陸奥將軍府 115

第一次上洛戦 116

秦野裕介

越前藤島の戦い〜新田義貞の敗死 131

谷口雄太

第二次上洛戦 118

青野原の戦い 119

伊勢転進をめぐる議論 121

伊勢・大和・摂津での戦い 121

「北畠顕家上奏文」 122

石津川の戦い 125

その後の影響 127

事典の記述から 132

自明ではなかった新田義貞の敗北 134

一次史料を読む 135

『太平記』を読む 136

新田義貞はどこで死んだのか 139

発掘されたという「冑」をめぐる 141

常陸関城・大宝城の落城  
↳ 北畠氏の東国経営失敗

149

前川辰徳

北陸方面の戦いを復元する 142

新田義貞の死とその後 144

南北両朝の並立 150

南朝の東国経営の拠点 151

親房の常陸「着岸」 152

親房の狙い 153

親房と戦った武士の証言 154

神宮寺城・阿波崎城の戦い 155

小田城における親房の活動 156

南朝を支えた常陸武士 157

常陸合戦の序章 161

駒城の戦い 162

小田治久の降参 163

藤氏一揆の衝撃 164

# 河内四条畷の戦いと楠木正行の生涯

171

小谷徳洋

関城・大宝城の落城と親房の撤退 165

春日顕国の没落 166

常陸合戦のその後 167

有名になった河内四条畷の戦い 172

楠木氏・南朝と南河内 172

河内・和泉の合戦と楠木一族 173

正行の年齢と「桜井の別れ」の虚実 174

建水分神社の扁額と正行登場 176

南朝の国司・守護として 176

観心寺鎮守社の炎上 177

正行の進軍ルート 179

連戦連勝の正行 179

渡辺橋の逸話 180

「返らしと…」 181

負けるつもりがなかった正行 182

「四条畷」への道 183

正行敗死

185

洞院公賢の日記と金剛寺僧禅恵の奥書 187

四条畷の戦いその後 187

## 第八章

# 観応の擾乱く足利直義の死 191

千葉篤志

室町幕府初期の二頭体制と直義・師直 192

貞和五年の室町幕府における抗争 193

尊氏の遠征 196

直義の南朝降伏と京都進撃 199

優勢になった直義 201

直義陣営の攻勢と尊氏陣営の京都撤退 202

師直の暗殺と尊氏・直義の和睦 205



# 九州における南北朝の動乱

215

秦野裕介

両陣営の講和と直義の不振 207

直義の京都脱出と正平の一統 209

尊氏の東国出陣と直義の死去 211

擾乱のその後 212

独自の展開をした南北朝期の九州 216

少弐頼尚とは 217

懐良親王とは 218

庚寅年以降の倭寇 221

九州の観応の擾乱 224

九州における武家方の没落 226

大保原の戦い 227

懐良親王の大宰府入りと征西將軍府の最盛期 230

日本国王良懷と明 232

終章

南北朝の合一　～抗争の終焉と後南朝のはじまり

239

渡邊大門

苦境に陥った南朝 240

一度目の和睦の機運 240

再度の和睦の話 242

正平の一統 243

北朝天皇の即位 244

その後も続いた和睦交渉 246

高まる和睦の機運 248

和睦の条件など 249

南北朝合一成る 251

特例措置による讓位 253

南北朝合一後の展開 254

旧南朝政策の変化 255

付録 南北朝主要合戦全録ダイジェスト 259

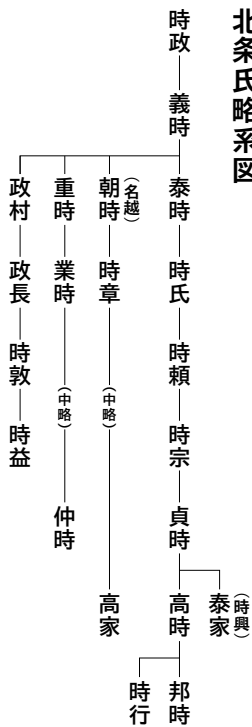
おわりに 282

執筆者紹介 284

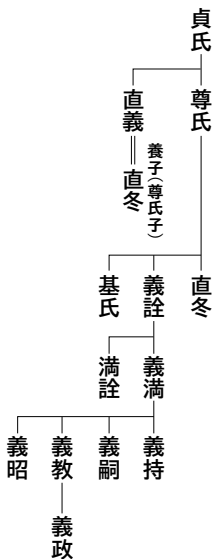
章扉図版／『本朝百将伝』より

図版／ジエオ

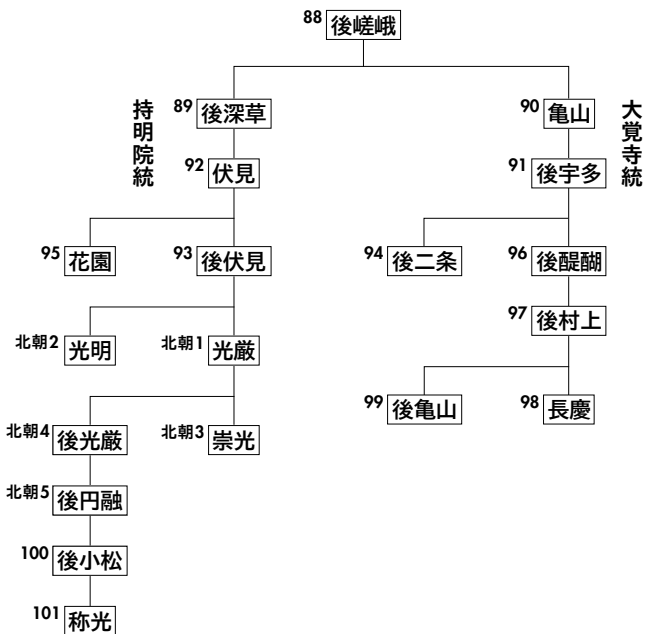
# 北条氏略系図



# 足利氏略系図



# 天皇家略系図



西暦													月		出来事
1331													9		
6	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	閏2	2	9	9	笠置山の戦い
後醍醐天皇が新政を開始	鎌倉幕府滅亡	鎮西探題攻略	鎌倉の戦い。東勝寺の戦い	関戸の戦い	分倍河原の戦い	久米川の戦い	小手指原の戦い	六波羅探題北方・北条仲時ら432人自刃	足利尊氏が六波羅探題を攻撃	足利尊氏が入京	後醍醐天皇が隠岐を脱出	千早城の戦い	赤坂城の戦い(10月落城)		

西暦													月		出来事
1335													7		
12	1	1	12	11	11	6	5	3	2	1	12	11	8	7	中先代の乱
利根川の戦いなど	青野原の戦い	金ヶ崎城の戦い(3月落城)	後醍醐天皇が吉野に移る	建武式目の制定(室町幕府の成立)	後醍醐天皇が北朝に三種の神器を渡す	京都の戦い	湊川の戦い	多々良浜の戦い	豊島河原の戦い	新田義貞が足利尊氏から京を奪回	箱根竹ノ下の戦い	矢作川の戦いなど	足利尊氏が中先代の乱を鎮圧		







既而奉 光明天帝  
我真正威相戰有  
過得成功其餘軍  
多艱難備嘗四  
百年累世開幕府

源尊氏



序章  
兩統迭立から正中の変・元弘の変まで

秦野裕介

正成、若本姓楠  
有忠義之勇有  
策之巧其守城  
戰之勞皆是勤  
之志也人悉知  
不贅此

楠正成



第三章  
摂津湊川の戦い  
楠木正成の敗死

生駒孝臣

## 摂津湊川の戦いの位置付け

建武三・延元元年（一三三六）五月二十五日、摂津国の湊川（現在の兵庫県神戸市を流れる川。現在は明治時代の付け替えにより中世の流路とは異なっている）・兵庫津一帯で前年に後醍醐天皇に反旗を翻した足利尊氏と、後醍醐天皇方の楠木正成・新田義貞の軍勢が激突し、義貞は京都へ敗走、正成も敗れて一族とともに自害した。これが摂津湊川の戦いである。合戦自体は午前十時頃から午後四時頃までのわずかな時間であったが、その結果がのちの歴史に及ぼした影響は計り知れない。

勝利を収めた尊氏は京都に上ると後醍醐天皇との戦いに決着をつけ、持明院統の豊仁親王（光明天皇）を新たな天皇とし、自身の政権の施政方針である建武式目を制定した。事実上の室町幕府の成立である。ところが、皇位を退いた後醍醐天皇は同年十二月に吉野へ亡命し、光明天皇に譲った天皇の象徴である三種の神器は偽物であり、自身こそが正統な天皇であると主張した。ここに光明天皇を戴いた京都の朝廷（北朝）と、後醍醐天皇を頂点とした吉野の朝廷（南朝）とが並立する南北朝時代が始まることになった。

このように湊川の戦いは、単に足利尊氏が楠木正成を破ったというだけのものではなく、南北朝内乱の本格的な幕開けとなった合戦である。なぜこの戦いが起こり、共に鎌倉幕府打倒に力を尽くした尊氏と義貞・正成が争わねばならず、正成が戦死することになったのか。本章ではこうした問題を検討しながら、湊川の戦いの全容を説明する。

## 足利尊氏の建武政権からの離反

建武二年（一三三五）七月に起こった故北条高時の遺児時行の信濃での挙兵と鎌倉の占拠（中先代の乱）は、翌八月に京都から後醍醐天皇の許可を得ずに出撃した足利尊氏によって鎮圧された。天皇は帰京命令を無視した尊氏の行為を謀反と見なし、十一月に新田義貞を尊氏の追討に遣わすも、十二月に義貞は箱根竹ノ下の戦いで尊氏に敗れた。尊氏は、義貞軍を追撃するかたちで京都を目指し、建武三年正月に京都一帯で新田義貞・楠木正成・北畠顕家らの軍勢と一進一退の攻防を繰り返した。しかし、結果的に九州へ落ち延びることとなり、後醍醐天皇と尊氏との戦いに一旦終止符が打たれた、はずだった。

後醍醐天皇以下、建武政権の首脳陣が戦勝ムードに浮かれる中、一人状況を冷静にみていたのが楠木正成である。正成は鎌倉時代末期に倒幕を進める後醍醐天皇に呼応して河内の千早・赤坂（大阪府千早赤坂村）で挙兵し、鎌倉幕府軍を相手に長期間に及ぶ籠城戦を展開したことで幕府滅亡に一役買ったことは周知の通りである。ちなみに、正成の実像については諸説あり、近年では鎌倉幕府の関係者（御家人、あるいは得宗被官<sup>とくそう</sup>）鎌倉幕府執権を世襲した北条氏嫡流家の家臣）だった可能性が提起されている（生駒・二〇一八など）。

天皇が建武の新政を開始すると、無位だった正成は従五位下に叙され、摂津・河内の国司・守護、和泉守護に任じられ、政権中枢のポストに就くなど、本来ならばあり得ない破格の待遇を与えられた。こうした建武政権における正成の位置は、“三木一草<sup>さんぼくいつそう</sup>”と呼ばれた結城親

光・名和（伯耆守）長年・千種忠顕らとともに、天皇の親衛隊長と呼ぶにふさわしい。しかし、正成は天皇の命令に唯々諾々と従うだけの人物ではなかった。

足利側の立場から書かれた歴史書『梅松論』（貞和五・正平四年へ一三四九）頃の成立）によると、正成は尊氏の西走後に新田義貞の誅伐と尊氏を九州から呼び戻して和睦を結ぶことを提案し、尊氏への使者は自身が担うことを天皇に奏上したという。その提案が一笑に付されると、正成は天皇が鎌倉幕府を滅ぼせたのは尊氏のはたらきのおかげであり、諸国の武士は誰もが義貞や天皇ではなく尊氏に従った。それをみて天皇は人望を失っていることに気付くべきですと辛辣な言葉をぶつけた。さらに三月ぐらいには尊氏が京都に攻め上ってくるであろうこと、それに対して天皇たちがどれだけ考えをめぐらそうとも、武略の道については自分に任せていただきたいと、涙を流して訴えたという。

### 的中した正成の予想

正成の予想はほぼ的中し、尊氏は三月に筑前多々良浜（福岡市東区）の戦いで後醍醐天皇方の菊池武敏らを破り、九州の武士たちを味方に付けて四月には京都を目指した。天皇への涙ながらの提言を却下された正成は、尊氏の迎撃を命じられて摂津の兵庫へと下る途中の尼崎から、再び天皇に対して諫言を送った。

今回の合戦は天皇が必ず負けること、かつて鎌倉幕府軍を相手に河内の金剛山に籠城した

ときは、国中の諸勢力が味方をしてくれたが、和泉・河内の武士たちや民衆、親類一族も難色を示していること、それゆえ天下が天皇を見捨てていることは明らかであり、自分は生きても無益なため、戦場で真つ先に命を落としてみせます、と言いつつたという（『梅松論』下）。

こうした正成の天皇に対する厳しい態度は、古態本（最も古いかたちを残す本）の西源院本『太平記』にも記されている。そこでの正成は、尊氏の九州からの東上に際して、後醍醐天皇を比叡山に避難させて空にした京都に尊氏軍を誘い入れ、義貞と自分とで挟撃する作戦を提案したものの、一年の内に二度も天皇が京都を離れる（同年正月に尊氏が入京した際に比叡山に行幸していた）のは面子めんづに関わるとして却しりぞけられ、兵庫へ下向せよとのみ命じられる。それに対して正成は、天皇が尊氏の大軍を討ち破る策も立てず、ただ自分をぶつけようとするのは、討ち死にせよとの命令と捉え、死を顧みないのは「忠臣勇士」の望むところと述べて兵庫へと下って行く（『太平記』第十六巻）。

『梅松論』と『太平記』という性格の異なる二つの史料において、正成が後醍醐天皇に対して同様の言葉を投げたとされるのは、それらが事実であると同時に、建武政権内に正成の言葉に耳を傾ける人物がいなかったこと、すなわち、正成が政権内部で孤立していたことを物語っている。

それに加えて、楠木正成といえ、後醍醐天皇の「忠臣」と捉える戦前以来の見方がいま

だに根強いが、こうした点は正成が後醍醐に妄信的に仕えていたわけではなく、むしろ終始冷静な目で後醍醐を見続けていたことを示している。ちなみに『太平記』で正成の口から発せられた「忠臣勇士」という言葉は、正成自身が自認していたかどうかではなく、この後に命を落とすことになる正成に同情した『太平記』作者の皮肉に過ぎない。

### 使命を果たそうとした正成

また、尊氏の復帰を提案したのも、武士の人望を集める尊氏こそが傾きつつある建武政権の建て直しに必要だと感じており、正成も尊氏を信頼していたからこそその発言だったと言える。だが、正成は尊氏と戦わねばならなかった。尊氏への和睦の提言や尊氏との共闘といった選択肢もあったかもしれないが、尊氏との対決を選んだのである。それが自身を引き立ててくれた後醍醐天皇に対する義理立てだったのか、千載一遇の勝機を狙ったものだったのかはわからない。いずれにせよ、正成は東上する尊氏の軍勢を迎え撃つという使命を果たそうとしたのである。

建武三・延元元年（一三三六）五月、正成は兵庫に先行する新田義貞のもとに向かった。『太平記』は京都から兵庫へ向かう道中、摂津国の桜井の宿（大阪府島本町）で嫡男の正行に「自分はこの戦いで死ぬだろうが、決して足利に屈することなく戦い続けよ」との遺訓を伝えて河内に返したという逸話を載せるが（『太平記』第十六巻）、古くから同書の創作であることが

指摘されている。ちなみに、京都での正成の屋敷は後醍醐天皇の内裏（二条富小路殿）の近くにあり、正行もそこで正成と同居していた可能性が高い。正成の屋敷は、建武三年正月に尊氏軍が入京した際、二条富小路殿と共に焼失していることから（『梅松論』上）、正成は尊氏が後醍醐天皇に反旗を翻して世情が不安定となった前年の十一月くらいには正行を河内に送り返していたと推測される。

同じく『太平記』には兵庫に到着して義貞に合流した正成が、合戦前夜に箱根竹ノ下の戦いの敗戦以降の失態で弱音を吐く義貞を励ました様子が描かれる（『太平記』第十六巻）。これも『太平記』のフィクションと考えられ、『梅松論』で後醍醐天皇に義貞の誅伐を勧めた正成の姿とは正反対である。これは『太平記』の作者が、義貞に同情的な人物として正成を認識していたことの反映とも言えよう。その後『太平記』は合戦の具体的な描写へと移っていくが、『梅松論』には足利勢の布陣や合戦の推移が詳細に記されているため、ここからは同書の描写を中心にみていきたい。

### 湊川の戦い

九州から進軍した足利勢は、海と陸とに分かれて東を目指した。五月十八日には瀬戸内海を進む尊氏を中心とした船団が播磨の室津（兵庫県たつの市）に停泊し、直義率いる軍勢は加古川（兵庫県加古川市）に到着した。二十四日に船団は細川定禅じょうぜんの四国勢を先頭に明石海峡・

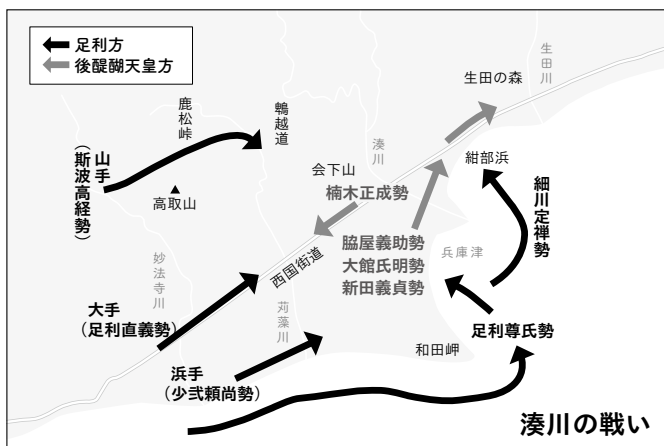


須磨（神戸市須磨区）一帯に、陸上の軍勢は摂津の一ノ谷（同上）から印南野（兵庫県加古川市）まで展開した。

義貞・正成軍が布陣する兵庫一帯を決戦の場と決めた足利勢は、大手（敵を正面から攻撃する軍勢）が直義を大将に、副大将を高師泰・大友・三浦・赤松とした播磨・美作・備前の軍勢、山の手は斯波高経を大将とした安芸・周防・長門の軍勢、海沿いの浜の手は少式頼尚を大将に、筑前・豊前・肥前・薩摩の軍勢に分けられた。

一方、正成・義貞の軍勢は、『太平記』によると正成が湊川の西の宿に布陣して陸上を進む足利勢に備え、義貞は兵庫の南端の和田岬（神戸市兵庫区）に、義貞の弟の脇屋義助は経島（平清盛が築いた波除けのための島）に、新田一族の大館氏明は灯炉堂の南の浜に布陣したという（『太平記』第十六巻）。

細川定禅の船団五百余艘は、二十五日の午前五時頃にそれら湊川・兵庫の敵陣を左手に見ながら海上を進み、その後に尊氏の船団が続いた。午前九時頃に兵庫島に近づいた足利勢の目の前には、湊川の後ろの山から里まで旗をなびかせて楯を並べた



正成の軍勢が布陣していた。

陸地を進む足利勢は午前十時頃に山の手、大手（須磨口）、浜の手の三方が同時に兵庫へ進軍したが、浜の手の少弐勢が一足先に進み、海上の尊氏の船から発せられた乱声（鉦や太鼓を鳴らして鬨の声をあげることを合図に戦端が開かれた）を合図に戦端が開かれた。

和田岬の新田勢は浜の手の足利勢の勢いに押され敗走し、大手、山の手軍勢も総崩れとなった。そこへ海上から生田の森（神戸市中央区）に上陸した細川定禅の四国勢が、兵庫の戦場から逃れようとする義貞勢に襲いかかる。生田の森は、寿永三年（一一八四）二月に源義経が摂津の福原（神戸市兵庫区）に布陣した平家を攻めた、いわゆる一の谷合戦の際に、一の谷・鴨越（ひよどりこえ）（神戸市北区・兵庫区）とともに戦場となった場所である（川合：二〇〇七）。義貞は激戦ののち、ここでも敗れて京都へと落ちていった。

### 新田勢の戦線離脱

新田勢が戦線から離脱したことで、足利勢の標的は楠木勢に絞られることになった。『梅松論』では新田勢を蹴散らした細川勢が、湊川の楠木勢と対峙する大手軍の直義勢に合流して楠木勢を追い詰め、午後四時頃に正成と弟の七郎左衛門（正季。西源院本『太平記』では正氏）以下五十余人が自害し三百人余りが、そして兵庫・湊川全体で七百人余りが討ち死にしたことが記される。直義勢と正成勢の攻防とその顛末については『太平記』の描写の方が詳しい。

同書がどこまで史実を伝えているかは判断し難いが、ほぼ同時代人の理解・認識の反映として捉えて参照しておこう。

新田勢が撤退したことで、前後を敵に挟まれて逃れることができないと悟った正成は、前方に控える敵を蹴散らした後に、背後の敵に挑むことを弟の正氏に提案し、七百騎ばかりで前方の直義の率いる大軍に向かっていった。正成たちの前方にいた足利直義の軍勢は、正成軍がはためかせる「菊水の旗」に出くわすと「幸いの敵」と思い、正成たちを討ち取ろうとして激しく攻め立てた。

だが、正成・正氏は全くひるむことなく縦横無尽に直義軍を追い散らして、直義の首だけを狙った。楠木勢の猛攻に耐えかねた直義は、須磨の上野に撤退したという。この戦いで直義の軍勢は五十万騎とあるが、七百騎ほどの小勢とされた楠木勢との違いを際立たせるために誇張された数字であろう。

尊氏は楠木勢に追撃されている直義の窮地を見て、将兵たちに直義の救援を命じると、足利一門の吉良・石塔・渋川・荒木・小俣・今川・一色・岩松・仁木・畠山、外様の大友・厚東・大内・土岐・赤松・千葉・小山・小田・佐竹らが応じ、手練れの兵七千騎余りが集められ、楠木勢の退路を断つため湊川の東を取り巻いた。

正成兄弟は、ものともせずそれらの軍勢に討って掛かった。尊氏勢は気力だけで奮戦する正成たちとまともにぶつかり合うことはせず、敵兵を分散させつつ徐々に包囲して矢種を尽

きさせる作戦に出る。楠木勢もむやみに攻撃を仕掛けることはしなかったが、四方八方に軍勢を展開するうち次々と犠牲を出し、およそ六時間の戦闘でわずか七十騎余りとなった。

ここで正成は、敵陣を突破して落ち延びることはできたものの、京都を発ったときから死を覚悟していたため逃げようとはしなかった。精根尽きるまで奮戦したところで、弟の正氏以下七十余人とともに自害しようとして湊川の北にある民家に入った。そこで正成は、将兵らとともに腹を切り、正氏とは七度同じ人間として生まれ変わって、必ずや朝敵を滅ぼそうとの願いを述べると、お互いに刺し違えて息絶えたという。

もちろん、正成の内面の描写や正氏との最期の掛け合いなどは、彼らに従ってその最期を見届けた者にしかわからない話であり、やはり『太平記』のフィクションと言わざるを得ない。しかし、戦況の推移については、実際に湊川の戦いに参加した足利方の武将たちの情報などに基づいていると考えられ、おおむね同書の描写を信用してもよいだろう。

### 同時代史料による戦いの顛末

一方『太平記』のように後世に作成された物語ではなく、古文書などの同時代史料にも湊川の戦いの顛末は記されている。それらには、五月二十五日に「兵庫湊河」「兵庫島」「摂州兵庫浜」で楠木正成と足利勢との合戦があり、足利勢・楠木勢それぞれに属して生き延びた武将たちの功績が記されるくらいである（「和田文書」「深堀家文書」「広峯神社文書」など）。そ

れでも、楠木勢の実態とその最期を綴った記録もあり、注目に値する。

楠木勢には楠木一族の神宮寺正房まさふさや和泉国の八木弥太郎入道法達ほうたつ・岸和田治氏はらうじらが加わっており、彼らは正成たちと運命をともしることなく、生き延びてその後も畿内各地で足利勢への抵抗を続けたことが知られる（『和田文書』）。

また、正成たちの最期を伝え聞いた興福寺の僧朝ちやうしゆん舜の書状には、正成たちが二十五日の午後四時頃に民家に籠もって火を掛けて自害したこと、その後足利方の細川（定禅か）が楠木勢の首を回収して二日ふたひがかりで正成の首を特定したこと、さらに兵庫の魚御堂うおみどうという寺院（神戸市兵庫区の阿弥陀寺に同寺の礎石だけが残る）に五十町の所領を寄進して正成の首供養を行わせたこと、正成の一族は二十八人が切腹し、一族の中には敵に討たれて傷を負いながら布引の滝（神戸市中央区）に逃れた者もいたといったことが記される（『諸庄々文書案』）。『梅松論』にも湊川の戦いが終了した時点で尊氏軍の本陣は魚御堂に置かれており、そこで正成の首実検が行われたことがみえている。

ちなみに『太平記』において正成の首は京都の六条河原（京都市下京区）にさらされたのち、尊氏たちが正成の妻子たちのことを思いやつて、正行のもとに送り届けたとされる（『太平記』第十六巻）。魚御堂での首実検のあと、正成の首がどうなったかは不明だが、実際に京都でさらし首にされて、河内の正行のもとに送られていたとすれば、正成が尊氏を信頼していたように、尊氏も正成に対して敵ながら敬意を抱いていたとみなすことができよう。

尊氏と正成はライバル関係のように捉えられることもあるが、そもそも尊氏と正成との間には身分の差があった。建武政権において両者が何らかの交流を持っていたことも指摘されるものの、やはり深い交流はなかったであろう。それでもこうした首をめぐるエピソードは、両者がお互いを最も理解しており、周囲もそれを認識していたからこそ生まれたものと言えるのではないか。

以上、『梅松論』『太平記』、同時代史料それぞれの湊川の戦いの記録をたどってみた。合戦の詳細は差があるものの、正成たちの最期は大同小異であるため、史実として確定できる部分を整理してみたい。

足利直義率いる大手軍と湊川で対峙した正成たちは、七百騎ほどの軍勢で奮戦したが衆寡敵せず、次々と兵たちは討たれ、自らも疲弊の際に達し、湊川の民家に籠もるとそこに火を放ち一族二十八人とともに切腹に及んだ。そして足利勢によつて焼け跡の中から見つけ出された正成の首は、魚御堂で丁重に供養されたところである。

### 湊川の戦いの余波

正成が湊川の戦いで敗死した二日後の五月二十七日、後醍醐天皇は三種の神器を携えて比叡山へと逃れた。皮肉にも建武政権の首脳陣が天皇の面子を優先して却下した、比叡山への避難という正成の提案を実行せねばならなかったのである。

その後、足利勢は入京を果たし、六月三日には持明院統の光厳上皇とその弟の豊仁親王を八幡やわた（京都府八幡市）に迎え入れた。尊氏はこの年の二月に九州へ逃れる際、朝敵とならないように光厳上皇と連絡を取り合つて上皇の院宣を獲得していた。つまり西走後の尊氏の軍事行動は、後醍醐天皇への反乱ではあったものの、光厳上皇というもう一方の天皇家の権威を戴いたことで正統化されたものだったのである。

尊氏は六月中、後醍醐天皇勢と京都争奪戦を繰り広げ、三木一草の最後の一人となった名和長年を破り京都を制圧する。その後も京都とその周辺では後醍醐天皇勢との攻防が続いていたが、尊氏は着々と自身の政権の足場固めを進め、八月には豊仁親王（光明天皇）を踐祚せんそ（天皇の位につくこと）させる。

十一月二日には尊氏と後醍醐天皇との和議が成立する。後醍醐天皇は三種の神器を光明天皇に譲渡し、「太上天皇」（上皇の正式名称）の尊号を与えられて帝位を退くこととなった。それにより、尊氏は自身の政権の所在地をかつての鎌倉幕府のように鎌倉に置か、それともこのまま京都に置くべきかという諮問しもんから始まる「建武式目」を制定し、室町幕府が成立するのである。ところが、十二月に後醍醐天皇が京都を出奔し、吉野（奈良県吉野町）で南朝を樹立したことは本章の冒頭で述べたとおりである。

湊川の戦いは、前記したように現存する古文書等の同時代史料では、摂津の湊川で合戦があり、そこで正成が討たれたという事実が簡素に記されるくらいである。こうした点から、

湊川の戦いは尊氏がそれまでの不利な形勢を挽回した、九州の多々良浜の戦いのような歴史的に一大転換点となるものではなかったという評価がある（森・二〇一七）。確かに大軍を擁して上洛する尊氏にとって、その途上での寡兵の新田・楠木軍との合戦は、単なる局地戦に過ぎなかったかもしれない。

だが、繰り返し述べるように、湊川の戦いを制した尊氏が後醍醐天皇との抗争に決着を付け（結果的にそうならなかったが）、半年余りで室町幕府を始動させたことを考慮すれば、やはり南北朝時代の画期となる合戦だったと言っても過言ではなからう。

何よりも尊氏は、図らずも敵対することになった正成に好意を抱きつつも、正成及びその背後に存在した楠木一族の勢力には最大限の警戒心を抱いていた。それは、湊川の戦い後の楠木氏の残党に対する掃討戦を見ても明らかである。

### さらに続く楠木一族の抵抗

湊川の戦いから二ヶ月後の七月、尊氏から和泉守護に任じられていた畠山国清は和泉・紀伊一帯で抗戦を続ける楠木・新田与党の征伐に従事していた。同年九月以降、湊川の戦いを生き延びた楠木一族や傘下の武士たちは畠山軍への抵抗を続け、十月には楠木一族のテリトリーである河内の東条（河内国の石川郡を北流する石川の東岸部。現在の大阪府太子町・河南町・千早赤阪村と羽曳野市の一部、富田林市の東部に相当する地域）に楯籠もり、徹底抗戦に及んだ。



それに対して尊氏は翌年の三月から十月まで東条への攻撃を繰り返し、河内南部一帯で幕府軍と楠木一族を中心とした南朝軍との合戦が続くことになる。

東条は正成の本拠地である千早・赤坂を中心とした地域であり、およそ四ヶ月にわたって鎌倉幕府の大軍を釘付けにして、鎌倉幕府の滅亡を導いた歴史を持つ。すなわち、鎌倉幕府の滅亡に自らも立ち会った尊氏たちにとって、当地は抵抗のシンボルとして記憶に新しい。楠木一族による東条での籠城を放置すれば、鎌倉幕府滅亡時のように彼らに与する勢力があらわれ、それは各地の反乱を誘発してやがては鎌倉幕府の末路と同じく、自分たちを滅ぼすことになるかもしれない。そうした危機感から尊氏は湊川の戦いの直後に、畠山国清に楠木一族の影響が強い河内・和泉での残党の討伐を命じ、およそ一年以上に及ぶ東条への総攻撃（楠木一族の掃討戦）を展開したと考えられる。

だとすれば、湊川の戦いは尊氏にとって自身の政権を成立させる上で画期となった反面、その政権に打撃を与えかねない不安材料を残すことになった合戦だったと言えるわけである。

湊川の戦いからおよそ十一年後、楠木正行が河内で挙兵し、幕府軍を圧倒するも四條しじょうなわて（大阪府四條畷市・大東市一帯）の戦いで戦死する。その後も、高師泰による二度目の河内東条への総攻撃、楠木正儀まさのり（正成の三男、正行の弟）を中心とした南朝軍と幕府軍との摂津・河内での激戦、京都をめぐる四度の攻防戦、正儀の最後の戦いとして同時代史料から確認できる永徳二・弘和二年（一三八二）閏正月の河内の平尾（堺市美原区）での幕府軍との合戦まで、正

儀が北朝・室町幕府に帰順した一時期を除き、楠木一族と室町幕府との戦いは絶えることがなかった（生駒…二〇二一a）。

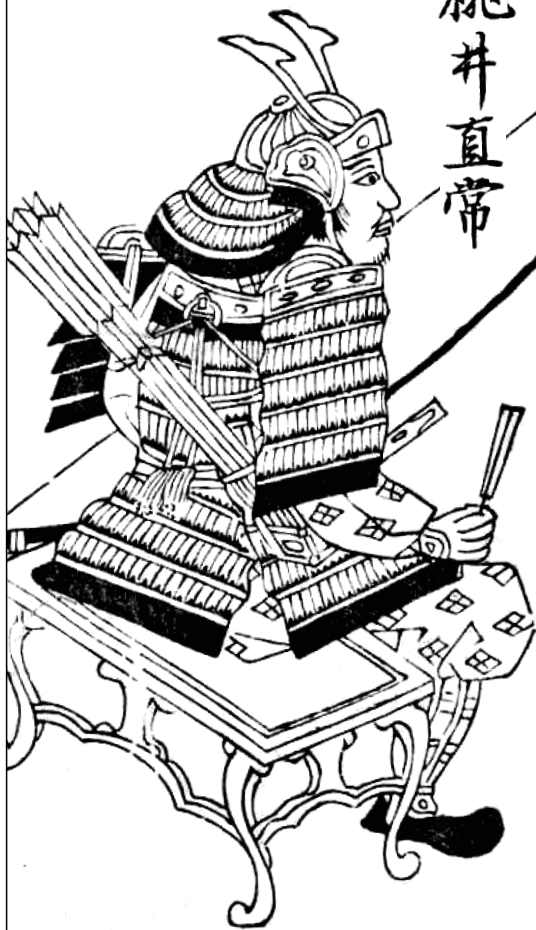
すなわち、湊川の戦いとは、南北朝内乱の開幕を決定付けると同時に、正成ら楠木一族と足利尊氏ら室町幕府との長い戦いの始まりでもあったのである。

## 主要参考文献

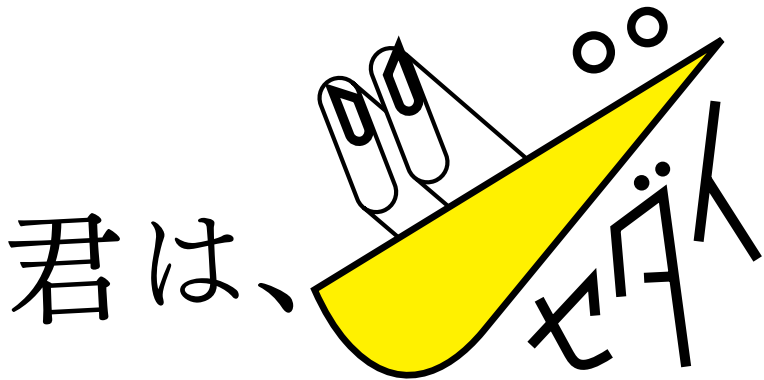
- 生駒孝臣『楠木正成・正行』（戎光祥出版、二〇一七年）
- 同『楠木正行・正儀』（ミネルヴァ書房、二〇二一年a）
- 亀田俊和・生駒孝臣編『南北朝武将列伝 南朝編』（戎光祥出版、二〇二一年）
- 亀田俊和・杉山一弥編『南北朝武将列伝 北朝編』（戎光祥出版、二〇二一年）
- 川合康「生田の森・一の谷合戦と地域社会」（同『院政期武士社会と鎌倉幕府』吉川弘文館、二〇一九年、初出二〇〇七年）
- 千早赤阪楠公史跡保存会編、生駒孝臣、尾谷雅比古『楠木正成 知られざる実像に迫る』（批評社、二〇二二年b）
- 森 茂暁『太平記の群像 南北朝を駆け抜けた人々』（角川ソフィア文庫、二〇一三年。初刊一九九一年）
- 森 茂暁『足利尊氏』（角川選書、二〇一七年）

直常者尊氏也  
曾師楠正  
兵法建武之  
立戰功既而  
朝或進攻京  
破義詮或退  
中而守城壘  
列顯其名

桃井直常



第四章 和泉堺浦・石津の戦い



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ**  
**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**